

くりの開心形整枝と収量・品質との関係

1. 試験のねらい

本県の黒ボク土壌におけるくりの開心形整枝の効果を検討するため、昭和52年植栽の丹沢、筑波および石鎚を供試して変則主幹形整枝との比較を行った。

2. 試験方法

昭和52年植栽の丹沢、筑波および石鎚を供試して、開心形区は樹高5～6mに抑え開心形整枝とし、対照区は変則主幹形整枝を基本としたせん定を行った。当初10a 当たり42本植えて調査を開始し、昭和59年春には第1次間伐を行い10a 当たり21本とし、さらに、平成元年春には第2次間伐で最終10a 当たり12.5本とした。

3. 試験結果および考察

- (1) 10a 当たり樹冠占有面積は、図－1に示すように間伐をした昭和59年および平成元年に縮小したが、丹沢と石鎚では両区に差は認められず、筑波では昭和59年以降、開心形区が小さい傾向であった。これは、丹沢と石鎚は開張性を示すのに対して、筑波は直立性の樹姿であるため、心抜き後も枝が立ちやすい特性によると考えられる。
- (2) 10a 当たり収量の推移と10年間の累積収量を図－2に示した。丹沢では両区に明らかな差は認められなかったが、石鎚では昭和61年以降は開心形区の収量が多く、累積収量も約350kg多かった。筑波では昭和59～60年の2か年に開心形区で収量がかかなり低かったため、累積収量も低かった。これは、第一次間伐に伴い開心形区の樹冠占有面積がかかなり小さくなったために収量も低かったと考えられる。
- (3) 上物率の推移を図－3に示したが、筑波と石鎚は開心形区で高い傾向が認められたが、丹沢では対照区と同程度であった。また、一果平均重は表－1に示すように、丹沢と石鎚で開心形区が大きい傾向を示したが、筑波では明らかな傾向は認められなかった。

4. 成果の要約

品種により差はあるが、開心形整枝により、10a 当たり収量は変則主幹形整枝と同程度かやや高くなり、また、上物率および一果平均重もやや高くなる傾向を示した。なお、開心形整枝では、主枝の背面から発生する逆行枝や直立枝は樹形を乱しやすいので、早めに基部から間引くようにする。

(担当者 果樹部 山田健悦)

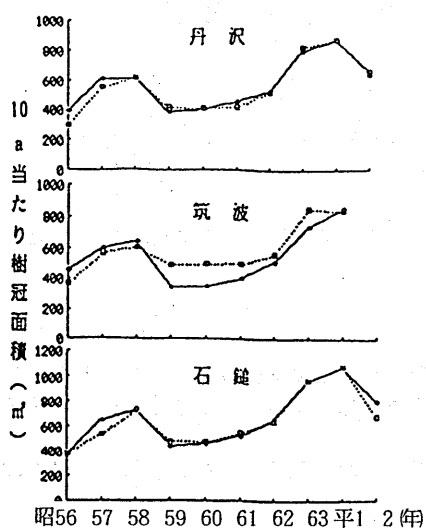


図-1 10a 当たり樹冠占有面積の推移

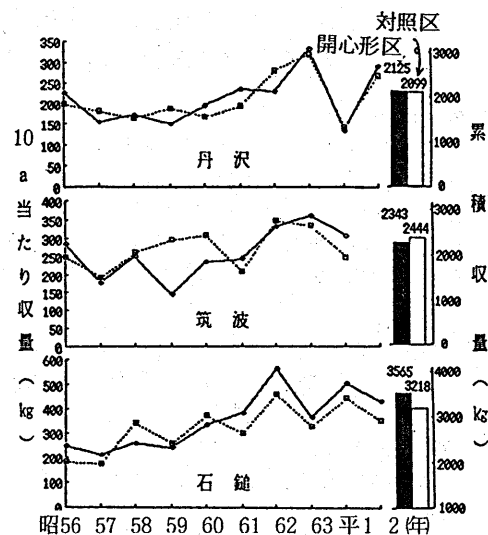


図-2 10a 当たり収量の推移と10年間の累積収量

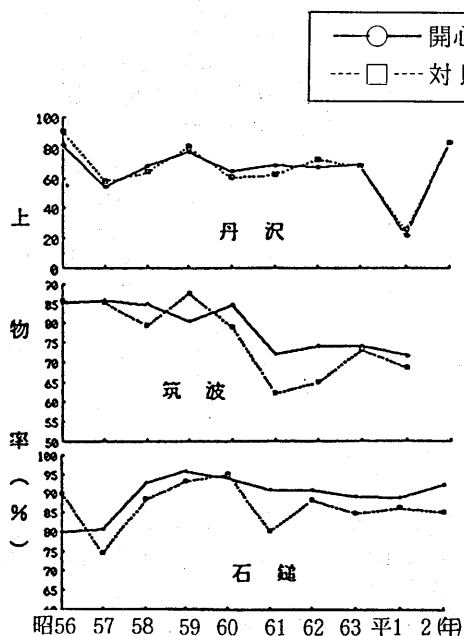


図-3 上物率の推移

表-1 各区の一果平均重(g)

品 種	開心形区	対 照 区
丹 沢	18.9	18.2
筑 波	15.4	15.5
石 鎚	13.6	12.6

注. 数値は10カ年の平均値。